

交換留学生同士の日常会話におけるコードスイッチングの機能

——「相手の言語」に切り替える事例——

The Function of Code-Switching in Everyday Conversations Among Exchange Students: Cases of Switching to ‘The Language of the Other’

テバンディット チッチャノック*

THEPBUNDIT Chidchanok

(要旨)

本稿では、「相手の言語」へのコードスイッチングが持ち得る機能について、料理場面における交換留学生同士の言語使用をもとに検討した。コードスイッチングとは、複数言語の話者が一つの発話の中で二つ以上の言語を使用することを指す。コードスイッチングが持つ機能に関して、もっとも頻繁に指摘されているのは、話者の言語能力の不足を補うということである。そのため、(より高い能力を持つと目される)自身の母語や、その場の共通言語へのコードスイッチングが焦点化される。しかし本稿では、先行研究におけるこのような焦点化は、それらの研究の多くが(大平, 2000; 服部, 2001; Hamdan, 2023など)、コミュニケーションにおける言語比重が非常に高い場面(教室など)を集中的に検討してきた結果であると考えられる。なぜなら、本稿で分析対象とした、豊富で多様な(言語・言語外の)資源が存在する環境では、自身の母語やその場の共通言語を用いて表現することができる際にも、わざわざ「相手の言語」にコードスイッチングするという現象が見られたからである。

本稿の目的は、コミュニケーションにおける言語比重が比較的低い場面において、「相手の言語」へのコードスイッチングが、なぜ、どのような状況で、どのようなやり取りの中で行われるのかを明らかにすることである。その分析とインタビューを通して、「相手の言語」へのコードスイッチングが持つ機能を検討する。

分析においては、交換留学生がグループで料理する場面及び食事の記録から、「相手の言語」使用場面をすべて抽出し、発話だけでなく、話者の視線、行動、場の状況等を踏まえつつ、伝えたい内容や受け取られた内容などを分析した。

その結果、「相手の言語」へのコードスイッチングが持つ機能として、7点を挙げることができた。そのうち6点は、先行研究で既に指摘されている点と重なりを持つが、残る1点は、管見の限り本稿による新たな発見であると言える。

キーワード：交換留学生同士、コードスイッチング、「相手の言語」、複数言語使用、料理場面

1. はじめに

複数言語を操る人々が、一つの発話中に異なる言語や方言を交えたり、切り替えたりすることは古くから観察されてきた。これはコードスイッチングと呼ばれており、単語、フレーズ、あるいは文のレベルで、意図的にも無意識的にも起こり得る(ガンパーズ, 2004)。コードスイッチ

* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程 (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

ングにはさまざまな定義があるが、Gardner Chloros (2009) は、複数言語話者が一つの発話の中で異なる言語、方言、または言語変種を混合して使用する現象であると述べている。

既存の研究においては、コードスイッチングが持つ機能には、共通言語の能力が不足している場合に、理解を助けること、会話を促進すること、強調すること、感情を表現することなどが挙げられる。しかし、コードスイッチングの機能はおそらくこれだけではあるまい。先行研究の多く（茂呂, 1999; 大平, 2000; 服部, 2001; 久保田, 2004; 高・村岡, 2009; 藤村, 2013; 吉野・西住, 2015; Fachriyah, 2017; Junaidi, 2019; Chew, 2021; Canestrino et al., 2022; Hamdan, 2023）は、話者にとっての母語やその場の共通言語（もっとも頻繁には英語）へのコードスイッチングに注目し、そこに見られた機能のみを論じているためである。これらのうち何点か（大平, 2000; 服部, 2001; 久保田, 2004; 田崎, 2007; 吉野・西住, 2015）は、その場の共通言語がすなわち、話者の一部にとっての「相手の言語」であるという環境だが、分析はあくまでも共通言語へのコードスイッチングという観点からのみ行われている。しかも、上述のすべての先行研究において、その分析対象場面は、言語の教室場面や自由会話といったコミュニケーションにおける言語比重が高い場面に限定されている。

しかし、コードスイッチングについては言語比重が高い場面に研究を限定することなく、言語比重が低い場面にも注目すべきであろう。なぜなら、コードスイッチングは、コミュニケーションにおいて、言語の重要性が高い場面だけでなく、より日常的で言語比重が低い場面でも起こり得るからである。コードスイッチングが発生するか否かは、話し手、聞き手、場の認識、及びその時の状況に依存し、多様な社会的及び文脈的要因によっても異なる。したがって、コミュニケーションにおける言語の比重が高い場面のみ分析をもって、コードスイッチングが持つ機能を十分に解明したとは言えない。

本稿では、より日常的で言語比重が低い場面でのコードスイッチングが持つ機能を検討するために、異なる言語背景を持つ交換留学生が共同生活するシェアハウスのキッチンでの料理場面を分析した。ここでは、言語だけではなく、非言語的な方法（身振り、表情、視覚的な手がかりなど）も含めた多様なコミュニケーション手段が活用される。調理を通じて、お互いになじみの薄い料理法、食材、食文化が共有され、相互作用が生じる。

尾辻 (2021) によれば、キッチンは物理的、文化的、社会的な資源、すなわち「場所のレパトリー」を提供し、これらが参加者の言語資源と組み合わせあって豊かなコミュニケーションや相互作用を促進する。料理器具や調味料の使い方、料理の匂い、音、色などの感覚的要素までもがコミュニケーションに影響する。

つまり、キッチンは、多様な意志疎通のための資源が提供されている環境だと言える。具体的には、その場にある原材料や調理器具を利用することができるだけでなく、英語や日本語といった共通言語を利用したり、ジェスチャーなどの非言語的コミュニケーション手段を活用したりして、意思疎通を図ることが可能である。しかし、このような状況において、交換留学生らは、しばしば、意図的に「相手の言語」へとコードスイッチングしていた。

本稿では、このような状況において、交換留学生たちが、なぜ、どのような状況で、どのようなやり取りの中で「相手の言語」にコードスイッチングするのかを観察し、その分析とインタビューを通してコードスイッチングの機能を明らかにする。

なお、本稿でいう「相手の言語」とは、以下の4つの条件を合わせ持つものとする。①話し手が、聞き手はその熟達者であると想定する言語。②話し手が聞き手はその話者集団に対して、愛着を持っていると想定する言語。③話し手が自身はその初学者であると自認する言語。④話し手にとってはシステマティックに学んだ経験がないか、あっても短期間であり、当人の主観的には、幾つかの表現をのぞいては「ほぼ忘れた」言語である。

2. コードスイッチングの機能に関する先行研究

コードスイッチングに関する研究では、主にバイリンガルの子供たちや移民などのコミュニケーションが注目されてきた。高・村岡（2009）によれば、バイリンガル話者や多言語話者などは無意識にコードスイッチングを行うことが多いが、これは彼らにとって、コードスイッチングがコミュニケーションの調整のためであるというより、言語環境や言語使用の規範に基づく自然な言語生成の一部である可能性を示している。

一方で、言語能力の不足がコードスイッチングの主因である場合、話し手が意識的に異なる言語に切り替える傾向がある。例えば、田崎（2006）は、言語能力の限界がコードスイッチングを引き起こす要因の一つであると論じている。これは話し手が自身の言語能力の制約を意識して、より利用・理解の容易な言語に切り替える場合に顕著である。同様の観点から、Canestrino et al.(2022)も、一つの言語から別の言語へと切り替えるコードスイッチングは話し手がコミュニケーションの困難さに遭遇した際に見られるという観察結果を報告している。そのため、コードスイッチングは、会話の発話や理解などを支援する機能を持つとも指摘されており、話者がその場の状況に応じて共通言語から母語へ、またはその逆へと言語を切り替える現象が多くの研究で観察されている。

これらの研究は、前述のように、主としてバイリンガルの子供たちや移民などを対象にしたものであったが、他方では、外語・第二言語教育の教室でのコードスイッチングに焦点を当てた研究も存在する。教室内での研究は主に教師と学習者間、あるいは学習者同士の具体的な会話データを用いて、コードスイッチングの機能を分析している。なお、これまでコードスイッチングの機能は様々に分類されてきたが、先行研究における機能の名称や分類の精緻さの度合いにはばらつきがあるため、本稿では、これらの先行研究における具体例を検討し、再分類をした。

まず、外語・第二言語教育の教室における教師・学習者間のコードスイッチングの機能について検討したい。

教師と学習者間でのコードスイッチングに関しては、以下のような機能が挙げられている。①明確化：誤解を避けるために使用する（田崎, 2006; 吉野・西住, 2015; Fachriyah, 2017; Junaidi, 2019; Hamdan, 2023）。②強調：自己の発話や主張を強化する（高・村岡, 2009; 藤村, 2013; Fachriyah, 2017; Junaidi, 2019; Hamdan, 2023）。③質問：質問を行うために使用する（Fachriyah, 2017; Hamdan, 2023）。④状況転換：異なる言語を使い分けることで状況を転換する（茂呂, 1999; 田崎, 2006; Fachriyah, 2017; Hamdan, 2023）。⑤関係構築：親密な関係を築くために使用する（高・村岡, 2009; Fachriyah, 2017; Junaidi, 2019; Chew, 2021）。⑥娯楽：楽しい雰囲気を作り出すために使用する（田崎, 2006; 藤村, 2013; Fachriyah, 2017; Chew,

2021; Hamdan, 2023)。これらは外語・第二言語教育の教室などでよく見られる機能である。

しかし、これはコードスイッチングの機能の一部に過ぎず、他の機能も存在する。Fachriyah (2017) によれば、コードスイッチングには次のような機能もある。⑦学習の橋渡し：教師はコードスイッチングをして、授業内容の説明やまとめ、学習者の質問へのアドバイスを行う。これにより、学習者が新しい語彙の意味を深く理解することを助けるとともに、共通言語である英語と学習者の母語の間で切り替えることで、理解度を即座に確認できる。⑧翻訳：教師は学習者がより容易に理解できるように、意味が同じである言葉を異なる言語における対応する語に切り替える。これらの機能は教師の教育を支え、学習者の理解を促進する。

次に、コードスイッチングは教師と学習者間だけでなく、学習者と学習者、友人同士の間でも観察される。その際の機能に4つがあげられている。⑨会話促進：自己の見解を伝達し、対話を効果的に進行するため、目的言語の語彙が不足している場合や、目的言語にない言葉を説明する際に使用する（大平, 2000; 服部, 2001; 久保田, 2004; 吉野・西住, 2015; Fachriyah, 2017; Junaidi, 2019; Canestrino et al., 2022; Chew, 2021; Hamdan, 2023)。⑩感情の表現：会話を活性化し、感情を強調するために使用する（大平, 2000; 服部, 2001; 久保田, 2004; 田崎, 2006; 高・村岡, 2009; 藤村, 2013; Chew, 2021; Hamdan, 2023)。⑪引用：他者の言葉を引用する際に使用する（田崎, 2006; Fachriyah, 2017; Hamdan, 2023)。⑫参加者への配慮：相手が会話に参加しやすくするために使用する（Hamdan, 2023)。

上述したコードスイッチングの機能について整理したものを表1に示す。

表1 先行研究におけるコードスイッチングの機能

No.	先行研究の機能		先行研究
1	会話促進	言語能力の不足に起因するもの	大平 (2000), 服部 (2001), 久保田 (2004), 吉野・西住 (2015), Fachriyah (2017), Junaidi (2019), Canestrino et al. (2022), Chew (2021), Hamdan (2023)
2	明確化		田崎 (2006), 吉野・西住 (2015), Fachriyah (2017), Junaidi (2019), Hamdan (2023)
3	質問		Fachriyah (2017), Hamdan (2023)
4	学習の橋渡しとして		Fachriyah (2017)
5	翻訳		Fachriyah (2017)
6	引用		田崎 (2006), Fachriyah (2017), Hamdan (2023)
7	強調		高・村岡 (2009), 藤村 (2013), Fachriyah (2017), Junaidi (2019), Hamdan (2023)
8	感情の表現		大平 (2000), 服部 (2001), 久保田 (2004), 田崎 (2006), 高・村岡 (2009), 藤村 (2013), Chew (2021), Hamdan (2023)
9	状況転換		茂呂 (1999), 田崎 (2006), Fachriyah (2017), Hamdan (2023)
10	関係構築		高・村岡 (2009), Fachriyah (2017), Junaidi (2019), Chew (2021)
11	参加者への配慮		Hamdan (2023)
12	娯楽として		田崎 (2006), 藤村 (2013), Fachriyah (2017), Chew (2021), Hamdan (2023)

本稿では「相手の言語」へのコードスイッチングが果たす機能について、先行研究で明らかにされたもの（表1）との異同を探る。また、機能に差異がある場合、その具体的な違いを明らかにすることを旨とする。

なお、本稿の位置づけを明確にするためには、先行研究におけるコードスイッチング先の言語を整理する必要がある。そのため、先行研究の検討例について、コードスイッチング先の言語を表2に示す。

表2 コードスイッチング先の言語

コードスイッチング先の言語	先行研究
A その場の共通言語として認識されている言語	茂呂 (1999), 大平 (2000), 服部 (2001), 久保田 (2004), 高・村岡 (2009), 藤村 (2013), 吉野・西住 (2015), Fachriyah (2017), Junaidi (2019), Chew (2021), Canestrino et al. (2022), Hamdan (2023)
B 自分の母語	高・村岡 (2009), 藤村 (2013), Fachriyah (2017), Junaidi (2019), Chew (2021), Hamdan (2023)
C 「相手の言語」	大平 (2000), 服部 (2001), 久保田 (2004), 田崎 (2007), 吉野・西住 (2015)

表2に示したように、コードスイッチングを論じた先行研究で、扱われている事例でのコードスイッチング先の言語は、3つのグループに大別できる (表2)。Aは、その場で共通言語として認識されている言語へのコードスイッチングである。Bは、話者の母語へのコードスイッチングである。例えば、外語・第二言語教育の教室で教師がその場での共通言語や自身の母語にコードスイッチングする事例がこれに該当する。また、英語が共通言語と認識されている場において、英語を母語とする話者が、別言語から英語にコードスイッチングするというような、A、Bの双方にかかるような場合もある。

また、Cの「相手の言語」に関しては、数は少ないが、幾つかの先行研究が存在する。しかし、これらの研究は「相手の言語」という概念を十分には捉えていないものと考えられる。というのも、これらの先行研究では、「相手の言語」は同時にその場の共通言語として認識されている言語でもあるからである。先行研究においては、そうした言語を論じる際に、共通言語であるという側面 (Aに相当) のみが注目され、それが同時に「相手の言語」でもあるという点は焦点化されていない。例えば、留学生を対象とした日本語の授業において、日本語は留学生である学習者にとって「相手 (教師) の言語」としての面も持っているにもかかわらず、これまでの分析では主にその場での共通言語として取り扱われていた (大平, 2000; 服部, 2001; 久保田, 2004; 田崎, 2007; 吉野・西住, 2015)。これらの先行研究において、留学生である話者は、日本語教室で、母語から日本語にコードスイッチングを行っている。こうした場での日本語は、その場の共通言語として認識されているため、表2中のAに該当する。しかし、日本語はこの場において、同時に教師 (相手) の言語であるという側面に注目すれば、実は、Cにも該当するということになる。

したがって、上述した一連の先行研究 (大平, 2000; 服部, 2001; 久保田, 2004; 田崎, 2007; 吉野・西住, 2015) は、AとCの重なる部分を扱っている (頁図1参照) ということになるが、これらの先行研究においては、Aの側面のみが注目され、Cの側面については論じられてはいない。また、これらの先行研究では、「相手の言語」を使用する際の認識、感情、意図については、本稿が注目するところとは異なる。したがって、同じくCに該当するとはいえるものの、本稿での「相手の言語」は異なる位置づけにある。本稿では、「相手の言語」を図1内のCの斜線部分に焦点を置いていることが、従来の研究との相違点である。

コードスイッチング先の言語は、互いに重なりつつも3つのグループに分けられると考えられ

る。この関係を図示すると、それぞれの関係がより明確になる（図1）。

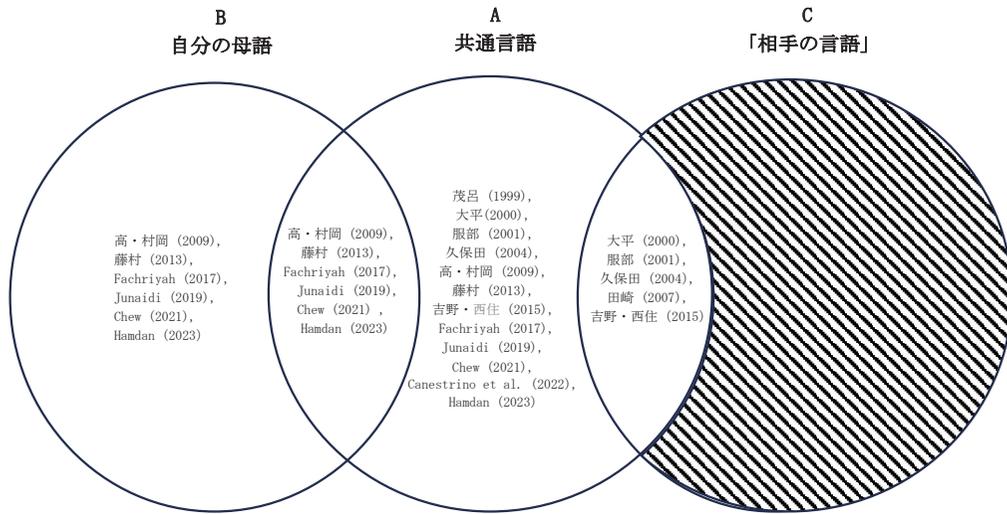


図1 本稿のコードスイッチング先の言語の位置付け

図1は、コードスイッチング先の言語がどのように位置づけられるかということを示したものである。図1には、AとBが重なる部分とAとCが重なる部分がある。前者は、コードスイッチング先の言語が共通言語であり、かつ話者の母語でもあることを示している。後者は、共通言語でありながら「相手の言語」でもあることを示している。コードスイッチング先の言語が話者の母語でもその場の共通言語でもなく、しかし、「相手の言語」であるという場合は、Cの斜線部分に限定される。本稿ではこの部分に注目する。

3. 調査の概要

本稿で分析対象とするデータは、2023年4月から8月にかけての4か月間に、日本の地方国立大学が設置した、主として交換留学生の暮らすシェアハウス（以下、シェアハウス）において収集した。収集の目的は、交換留学生間の言語使用の特徴及びコミュニケーションを媒介する資源の活用方法を明らかにすることであった。

上記の期間中、3グループに分けた交換留学生9人が共同で調理する場面を、ビデオ撮影と音声録音で記録した。また、その後の共同での食事場面及び個別のフォローアップインタビューを録音した。これを各グループで月に1回ずつ計4回繰り返した。1回の料理場面は1時間半程度であった。メニューに関しては、①どのようなメニューにするかは調査者は指定せず、1回の食事につき、1つ以上の異なる料理を作ること ②何を作るかは、参加者留学生が交替で決めること ③何をやるかを決めた人がレシピを調べ、他の参加者に指示すること、とした。料理が出来上がると、毎回作った3人と調査者が一緒に食事をした。食事時間も1時間半程度であった。フォローアップインタビューを除くデータの時間数は、合計で約36時間であった。フォローアップインタビュー

では、個別の音声記録と文字データを併用した。

シェアハウスのキッチンでは、様々な言語や文化背景を持つ交換留学生たちが、育った地域の調味料を使用して料理をしていた。この多様な環境で、交換留学生たちは自分の複言語レパートリーやその場にある資源などを活用し、コミュニケーションを取っていた。また、料理場面は、予測不可能な状況が多々発生し得るという点で教室内での研究とは相当程度に異なる。例えば、料理の過程での失敗の可能性、レシピの突然の変更、または即興が求められるなど、料理に固有の不確実性が存在する。これらの状況に対して、参加者は柔軟に対応し、創造的な解決策を見つける必要がある。一方で、教室環境は通常、より構造化されており、活動は計画に基づいて進行する。教室では、予期せぬ問題に対処する機会がはるかに少なく、コミュニケーションの形態も比較的定型化されている。

本稿では、コミュニケーションにおける言語比重が低い場面を分析対象とするため、その顕著な具体例としてキッチンでデータ収集を行った。

3つのグループの調理中のコードスイッチングの回数を観察したものを表3に示した。

表3 「相手の言語」へのコードスイッチング回数

グループ	1回目	2回目	3回目	4回目	合計
1	16	6	10	4	36
2	0	2	0	0	2
3	2	2	0	2	6

表3から、グループ1はグループ2およびグループ3と比較して、「相手の言語」へのコードスイッチングの回数が多く、その差は顕著であった。この結果を受けて、本稿ではグループ1を主たる調査対象とし、「相手の言語」へのコードスイッチングの機能を探求するために、フォローアップインタビューも追加した。

なお、倫理的な観点から、この研究は大学の許可を得て実施した。参加者には、研究の目的と概要を文書及び口頭で明確に説明し、自発的参加することを確認した。収集したデータは、研究発表の目的以外には使用しないこと、個人情報厳格に管理することを書面および口頭で示した。

参加者のプロフィールを表4に示す。

表4 交換留学生のプロフィール

(2023年現在)

名前 (仮名)	出身地	母語	年齢	日本語 能力試験	調査開始時の 日本滞在期間	母語以外の言語レパートリー
ブン	タイ	タイ語	21歳	N3	7か月	英語、中国語、韓国語
ナム	タイ	タイ語	21歳	N3	7か月	英語、中国語
シャー	台湾	中国語 ¹	20歳	N1	7か月	英語、中国語、韓国語、タイ語

3人の交換留学生は日本の地方国立大学に在籍しており、彼らの日本語能力は中級から上級である。年齢は20代で、日本での滞在期間は調査開始時点で7か月である点が共通している。また、それぞれが複数の言語を話す能力を有しているが、本稿における「相手の言語」の定義にしたがえば、タイ人のナムとブンにとっての「相手の言語」は中国語で、台湾出身のシャーにとっては

タイ語である。ナムとブンは中学時代に中国語の基礎を学んだが、主観的にはほぼ忘れてしまった言語だという。一方、シャーは学校教育機関でのタイ語学習経験はないものの、台湾の様々なメディアを通して、タイ語に触れた経験がある。

3人は日本に留学後、互いの言語に興味を持ち始めた。ブンとナムは、タイで生まれ、出身大学も同じであり、ナムとシャーはルームメイトである。調査時には3人は同じ日本語の授業を一緒に受けており、授業外での交流も多く、非常に親しい関係にある、ということ調査は事前のラポール形成過程で確認した。

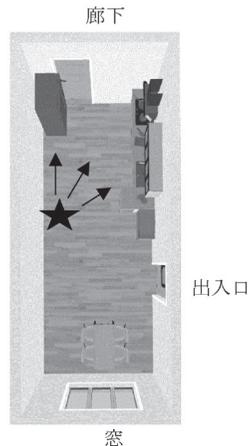


図2 シェアハウスにおけるキッチンのレイアウト

図2は、データ収集に使用したシェアハウスのキッチンシミュレーション画像で示したものである。出入口を入ると右側の奥からIHコンロがあり、その隣にシンク、洗い物置きがある。シンクの上には調理器具の収納スペースがある。炊飯器や電子レンジを置くための家電ラックも配置されている。その反対側の隅に冷蔵庫が1台ある。左の窓側に食事するための四角テーブルと椅子が4脚置かれている。

なお、星の位置はカメラの設置場所を、矢印は動画の撮影方向を示している。

4. 分析

4.1 分析の手法

本稿における分析は、次の手順に従った。

1) 会話の整理

会話を文字化した。ただ、本稿は定量的な分析を目的としておらず、その上、会話には日本語、タイ語、中国語が混在しているため、読みやすさを考慮し、一部の表現を変更または簡略化している。本稿で用いられている記号や略語については、文末注²で説明している。

2) 焦点の設定

本稿では、「相手の言語」にコードスイッチングした部分のみに焦点を当てるため、「相手の言

語」使用場面をすべて抽出した。具体的には、ブンとナムが使用する中国語とシャーが使用するタイ語の場面を抽出し、分析の対象とした。

3) 発話の意図と受け取り方の検討

単に発話の内容だけでなく、誰が誰に対して何を伝えたいのかを解釈するにあたっては、発話のみならず、話者の視線、行動、場の状況等から推定し、発話が話者間で共有される内容であったかどうかを含めて検討した。また、話者が「相手の言語」を使用した際の意図、その利用がどのように受け取られたか、そしてそれがどのような反応につながったかについて考察した。

4) フォローアップインタビュー

抽出した各場面の内容や意図を確認するため、後日、調査協力者に個別インタビューを実施した。その過程で「相手の言語」へのコードスイッチングに関する補足情報も得た。

5) 先行研究の検討と分類

先行研究を詳細に検討した結果、そこで明らかになった機能を具体例に基づいてカテゴリ別に分類し（表1, 2, 図1）、本稿で得たデータとこれらの例を比較して再分類した。

6) 分析結果の妥当性及び解釈の検討

分析手法の妥当性を評価するため、文字化と匿名化処理をほどこしたデータ及びその解釈を同じ分野の研究者に見せ、解釈の妥当性について深い議論を重ねた。

7) 結論の導出

上記のプロセスを経て、コードスイッチングの機能に関する考察を行った。その結果を表にまとめて論じた（表5）。

表5 先行研究が指摘した機能及び本稿で発見した機能

No.	先行研究が指摘した機能		先行研究	本稿で発見した機能
1	会話促進	言語能力の不足に起因するもの	大平 (2000), 服部 (2001), 久保田 (2004), 吉野・西住 (2015), Fachriyah (2017), Junaidi (2019), Canestrino et al. (2022), Chew (2021), Hamdan (2023)	
2	明確化		田崎 (2006), 吉野・西住 (2015), Fachriyah (2017), Junaidi (2019), Hamdan (2023)	
3	質問		Fachriyah (2017), Hamdan (2023)	
4	学習の橋渡しとして		Fachriyah (2017)	「相手の言語」学習を支援する
5	翻訳		Fachriyah (2017)	
6	引用		田崎 (2006), Fachriyah (2017), Hamdan (2023)	
7	強調		高・村岡 (2009), 藤村 (2013), Fachriyah (2017), Junaidi (2019), Hamdan (2023)	
8	感情の表現		大平 (2000), 服部 (2001), 久保田 (2004), 田崎 (2006), 高・村岡 (2009), 藤村 (2013), Chew (2021), Hamdan (2023)	表現の効果を増幅させる

9	状況転換		茂呂 (1999), 田崎 (2006), Fachriyah (2017), Hamdan (2023)	場の性質に関する認識の共有
10	関係構築		高・村岡 (2009), Fachriyah (2017), Junaidi (2019), Chew (2021)	仲間意識醸成
11	参加者への配慮		Hamdan (2023)	参加者への配慮
12	娯楽として		田崎 (2006), 藤村 (2013), Fachriyah (2017), Chew (2021), Hamdan (2023)	娯楽として・楽しい雰囲気を作り出す・ユーモアとして
13				返礼として

表5より、「相手の言語」に切り替える機能が、先行研究が示した機能と重複している部分があることが明らかになった (4, 8, 9, 10, 11, 12)。先行研究で発見された機能と同様の機能を、「共通言語」ではなく「相手の言語」へのコードスイッチングもまた果たしている様子が観察されたのである。

4.2 分析

4.2.1 「相手の言語」学習を支援する機能

ブンが指示役となって、ナムとシャーに作業を配分している場面である。この行為により、シャーはブンを「先生」と呼び、タイ語では「先生」をどう言えばよいのか質問した。続いて、ブンは豚肉を切る作業の進捗をナムにタイ語で伝え、これがもうすぐ完了することを示唆した。この時、シャーはブンが発言したことを理解できなかったため、何を言っているのか確認しようとした。

発話番号	発話者	発話	発話内容の日本語訳
1.	ブン	: 皆・・頑張つて。	
2.	シャー	: はい。先生・・・タイ語の先生は・・。	
3.	ナム	: ^{クルー} ครู。	先生
4.	シャー	: ^{クルー} ครู・・・ ^{クルー} ครูブン。	先生 ブン先生
		<中略>	
5.	ブン	: ^{クライレーウ} ไ้แล้วไ้แล้ว。	もうすぐ もうすぐ
6.	シャー	: ^{クライ} ไ้なに?。	
7.	ナム	: ^{クライレーウ} ไ้แล้วはもうすぐ。	もうすぐ
8.	シャー	: ^{クライレーウ} ไ้แล้วไ้แล้ว。	もうすぐ もうすぐ
9.	ナム	: <笑>かわいい。	

この会話において、シャーが「相手（ブンとナム）の言語」であるタイ語に関心を持っていることが分かる (2)。シャーはタイ語で「先生」という単語を知りたいと質問した。ナムから教えてもらった後、タイ語にコードスイッチングしつつ、ブンの名前を入れる形で発話を産出した(4)。

シャーの発話4の語順に注目したい。シャーの母語である中国語でも、この場での共通言語である日本語でも、教師の名は先生を意味する単語の前に入る。つまり、中国語では「ブン^{ラオシャー}老師」

日本語では「ブン先生」となるが、タイ語では逆に名が後ろになる。したがって、シャーによる「^{クルー}ブン」はタイ語の正しい語順である。そのため、シャーがなぜ正しい語順で発話できたのかをフォローアップインタビューで尋ねた。

シャーによれば、タイ語で「^{クルー}ブン」(先生)という単語とそれを使用する時の語順について以前にもブンに尋ねたことがあるが、その際に習った「^{クルー}ブン」の発音は忘れていたものの、語順は記憶していたとのことである。これは、彼らの日常生活の中で互いに言語を教え合うことが珍しいことではなく、ありふれた出来事であることを示している。

その後、シャーはまた、ブンの発言したタイ語の意味がわからなかったため、シャーは「相手の言語」であるタイ語と日本語を混ぜた(6)。ナムからの説明を受けた後、シャーは再び「相手の言語」にコードスイッチングした(8)。発話番号(4)と(8)では、シャーは学んだ単語を相手に聞かせようとしている。

この発話は、先行研究で指摘されている明確化の機能に該当する可能性がある。繰り返しは、話し手や聞き手が情報を明確にしたり(田崎, 2006; Chew, 2021)確認する目的で使用されることがある。そのため、共通言語と母語を交互に使い、同じ意味の言葉を繰り返すこともある(Fachriyah, 2017)。発話番号(4)と(8)の意味を理解した後での「相手の言語」へのコードスイッチングは、話し手が「相手の言語」を使ってみて、発話を反復し、その言葉を記憶するためである。したがって、シャーがブンの言葉を真似て繰り返したのは、「相手の言語」を学ぶための一つの方法と言える。

4.2.2 参加者への配慮の機能

次は、3者間の会話で、パンケーキを作っている場面である。ナムは焼く準備のできたパンケーキ生地をフライパンに入れ、パンケーキが焼けるのを待っている。しばらくして、シャーは焦げた匂いに気づき、「何の匂い」かを尋ねる。ブンは笑いながら、これがパンケーキの匂いだと答える。

発話番号	発話者	発話	発話内容の日本語訳
10.	シャー	: なんか・・・この匂いは何の匂い?。<笑> [焦げる匂いを感じたシャーが尋ねた。]	
11.	ブン	: パンケーキ。<笑> [ナムはブンの答えの後で、自分が作っているパンケーキについて質問した。]	
12.	ナム	: ^{スワイマイ} สวยไหม?。	いい感じですか?
13.	ブン	: ^{ビャオリヤンマ} 漂亮嗎・・・ ^{ビャオリヤンラー} 漂亮了。	いい感じですか?・・・ もういい感じです
14.	シャー	: ^{ビャオリヤンマ} 漂亮嗎・・・ ^{ビャオリヤンラー} 漂亮了・・・はないよ。	いい感じですか?・・・ もういい感じです

ナムが作ったパンケーキは少し焦げていたが、ナムは笑顔でその状況を楽しんでおり、発話番号(12)では、ブンにタイ語で「^{スワイマイ}สวยไหม?」(いい感じですか?)と尋ねる。ブンは発話番号(13)シャーの母語である中国語で、「^{ビャオリヤンマ}漂亮嗎・・・^{ビャオリヤンラー}漂亮了」(いい感じですか?・・・もういい感じです。)と応える。

この場面でブンとナムは、自身らの母語であるタイ語を使用することもできるし、日本語で話すこともできる。しかし、ブンはナムの質問を中国語に訳し、その質問に対する答えも中国語に切り替えた。この時、ブンが使用した中国語は、ブンの母語であるタイ語からの干渉が起きている。「了」^{ラオ}を完了を意味するものとして使用しているという点である。中国語では不自然だが(14)、タイ語では同様の場合で完了を示す表現を用いることには問題が無い。これは、ブンが「相手の言語」をできるだけ活用しようとする際、時には自分の母語と「相手の言語」を組み合わせることを示している。

さらに、ブンはシャーが自分の伝えたい内容を理解できるように配慮していることもわかる。同じ意味の言葉を他の言語に切り替えることは、誤解を避けるために行われることがある (Fachriyah, 2017)。また、確認や明確化のために行われることもある (田崎, 2006; Chew, 2021)。しかし、ブンのコードスイッチングは、単に情報の明確化や誤解を避けるためだけではない。

Hamdan(2023)によると、コードスイッチングの機能として、話し手が共通言語で話しかけても、聞き手が母語で返答するとき、話し手も聞き手に合わせて言語を切り替えることがある。このような発話行為は、話し手が相手に合わせてコードスイッチングを行っていることを示している。本事例では、この場での共通言語として認識されている日本語で表現できるにもかかわらず、ブンは意図的にシャーの母語である中国語に切り替えている。これは、相手からの要求がなくても自発的に行われる調整であり、彼らが相手の存在に深く配慮していることを示している。

4.2.3 娯楽としての機能

以下に述べる2つの機能は、いずれも娯楽のカテゴリーに分類できる。例示に使用したデータから、彼らは「相手の言語」への切り替えを、楽しい雰囲気を作り出し、ユーモアとして使用していることがわかる。まず、楽しい雰囲気を作り出す機能について述べる。

1) 楽しい雰囲気を作り出す機能

この場面では、彼らは台湾料理を作っており、台湾出身であるシャーが教える役割を担っている。彼はブンとナムに作り方を説明し、作業の分担をした。

発話番号	発話者	発話	発話内容の日本語訳
15.	ブン	: うん・・任せください。 ^{ラオシー} 老師。	先生
16.	シャー	: ^{ラオシー} 老師?。<笑>	先生
17.	ナム	: ^{ニーハオ} 你好。	こんにちは
18.	ブン	: ^{ラオシーザイチェン} 老師再見。	先生, さようなら
19.	シャー	: Bye Bye。<笑>	バイバイ

発話番号(16)では、シャーが作り方を説明した後、ブンはシャーを「^{ラオシー}老師」と呼んだ。ナムは「^{ラオシー}老師」という言葉を聞き、遊び心を込めて「相手(シャー)の言語」である中国語で「^{ニーハオ}你好」と言った(17)。

フォローアップインタビューによると、ブンとナムは、中学時代に基礎中国語を学んだ共通の

経験がある。ブンナムはナムの後でまた中国語での発話を続け、発話番号(18)「^{ラオシーザイチェン}老師再見」とまで言った。これは、ある種の再現である。なぜなら、そのやり取りは、彼らの中学時代の授業習慣の一部であるからだ。ブンナムが中国語で会話した後、シャーは発話番号(19)でブンナムが使った中国語の言葉を英語に切り替えてバイバイと言った。

通常、異なる言語で同じ意味の言葉を表現することは翻訳として理解されるが、この場合、シャーはブンナムが話した中国語を理解していることを示すために、意図的に同じ意味の英語を使用して応答している。

言語の切り替えは、ジョークを生み出し、雰囲気を楽しむ役割を果たしている (Fachriyah, 2017)。言語を切り替えることで楽しむには、ある程度の言語能力が必要であるという研究もある (藤村, 2013; Hamdan, 2023)。しかし、この場面では、ブンナムは自分たちが知っているごくわずかな範囲ながらも「相手の言語」である中国語を活用しており、同じ意味を持つ言葉であっても、何語で言うかによって、反応が変わる可能性があることを理解している。

2) ユーモアとしての機能

次もパンケーキを作っている時の会話である。ナムが作ったパンケーキについての、日本語の単語と、その単語と音が似たタイ語の双方を使ったやりとりである。3人はパンケーキを作りながら言語交換を楽しみ、「相手の言語」に切り替える。

発話番号	発話者	発話	発話内容の日本語訳
20.	ナム	: わたしのパンケーキは一番きれい。	
21.	ブン	: ^{キョーレイ} ซีเหรื。 <笑>	容貌がよくない
22.	シャー	: きれい?。	
23.	ブン	: なんか・タイ語の ^{キョーレイ} ซีเหรื・・・ タイ語の ^{キョーレイ} ซีเหรืの発音はブス・・・。	
24.	シャー	: <笑> そうなの・・・じゃ・・・さっきは?。	
25.	ブン	: きれいじゃない・・・ ^{キョーレイ} ซีเหรื。	容貌がよくない
26.	シャー	: じゃ・・・人だったら・・・ ^{キョーレイ} ซีเหรื。	容貌がよくない
27.	ブン	: うん。	
28.	シャー	: ^{キョーレイ} ซีเหรืคะ。	容貌がよくない
29.	ブン	: すごい・・・ <笑>・・・ なんか・・・ 私はきれい?・・・ ^{キョーレイ} ซีเหรืคะ・・・ <笑>。	容貌がよくない
30.	シャー	: それはだめ?。	
31.	ブン	: 実は親しい友達なら・・・おもろいけど・・・ 知らない人なら・・・失礼。	
32.	シャー	: そうね・・・じゃ・・・ブンお願い・・・私はこれやります。 [シャーはブンに黒砂糖を溶かす作業を頼んで、自分はパンケーキの生地をこねる。]	
		<中略>	
33.	ナム	: <笑>	

[ナムは自分のパンケーキを見ると笑ってしまった。そのため、シャーはナムの方を向いた。]

34. シャー : やばい。<笑>
 35. ナム : すごいでしょ?。
 36. ブン : すごいでしょ?。<笑>
 37. シャー : すごく^{キョレイ}シム。 容貌がよくない
 38. ブン : すごいき^{キョレイ}シムって。<笑> 容貌がよくない
 39. ナム : なんか・褒めるのに・・・・
 なんて嬉しくない。

ブンはシャーに自分の母語であるタイ語の「^{キョレイ}シム」(きれいではない、容貌がよくない)という表現を教えた。シャーは「相手の言語」の新しい表現を受け入れてから実際に使ってみた。この会話では、日本語の「きれい」とタイ語の「^{キョレイ}シム」が正反対の意味を持つことから、ユーモアが生まれる。発話番号(37)と(38)では、ナムが作ったパンケーキを褒めているように見えるが、シャーはすでに「^{キョレイ}シム」の意味を理解しており、また、そのパンケーキの様子も分かっているため(34)、日本語の「きれい」と似た発音の、実は反対の意味タイ語を言って、笑いを誘っているのである。ナムもこのニュアンスを理解し、発話番号(39)でシャーが言ったことに対して応答する。

先行研究によれば、言葉遊びには高い言語能力が必要とされている(藤村, 2013; Hamdan, 2023)。しかし、この会話では、シャーはその場で学んだ「相手の言語」を使い、相手を笑わせている。彼らはこの場面で言葉を見事に使いこなしている。

4.2.4 返礼としての機能

次は3人がブルーベリーチーズケーキを作っている場面で、クラッカーを潰す前にブンがナムとシャーにプラスチック袋を渡した。この袋に入れて潰すのである。シャーはそれに対して感謝を表した。

発話番号	発話者	発話	発話内容の日本語訳
40.	シャー	: ブン・・・・ありがとう。	
41.	ブン	: いいえ・・・・ ^{ブーアォヂン} 不要緊。	どういたしまして
42.	シャー	: ^{ブーアォヂン} 不要緊。[↑] <笑>	どういたしまして
43.	ナム	: ぶ・・・・。 <	
44.	シャー	: > ^{マイベンライ} ไมเงินไร。	どういたしまして
45.	ブン	: ^{マイベンライ} ไมเงินไร[↑] <笑>・・・・ 今タイ語。<笑>	どういたしまして
46.	ナム	: タイ語で答えてくれた。<笑>	

この会話では、ブンとシャーのやり取りが注目値する。タイ人のブンが「相手(シャー)の言語」である中国語に切り替えると、シャーは「相手(ブン)の言語」で返答する。発話番号(41, 44)これは、一方が「相手の言語」を使用すると、もう一方がそれに対応して同じく「相手の言語」で応じるというパターンである。

この文脈でのコードスイッチングは、言葉の明確化や翻訳の機能を持つものと解釈することも可能だが、ここでは、シャーは日本語で「どういたしまして」と言うことができるにもかかわらず、タイ語を選んだ点が重要である。「不要緊」^{プーアオチン}と「ไมเป็นไร」^{マイペンライ}は同じ意味だが、フォローアップインタビューによると、これらの言葉は、互いに言語を教え合って学んだものである。そして、彼らは相手が熱心に教えてくれたため、なるべく相手から習った言葉を使いたいと思っている。ここに見られるのは、もしあなたが私の教えた言葉を使ってくれるなら、私もあなたに教わった言葉を使うというパターンである。この時、「相手の言語」への切り替えは、相互の返礼として機能している可能性がある。これは先行研究では指摘されていない、新しい機能である。

4.2.5 表現の効果を増幅させる機能

以下の会話は台湾料理の場面であり、この時、主な材料は卵である。まず、シャーがフライパンに卵を割り入れる。そして、ブン^{ビアオリアン}はフライパンの中の卵の様子を見てからシャーの方を向き、シャーの母語である中国語に意図的にコードスイッチングする。

発話番号	発話者	発話	発話内容の日本語訳
47.	ブン	: シャーやる？。	
48.	シャー	: うん。多いですから。	
[発話した後、シャーはフライパンに卵を割り入れた。]			
49.	ブン	: 漂亮漂亮。 <small>ビアオリアンビアオリアン</small>	見目よい 見目よい
50.	シャー	: น่ารักน่ารัก。 <small>ナラックナラック</small>	かわいい かわいい

この場面では、両者ともが「相手の言語」に切り替えている。その点では、4.2.4の「返礼」と同様である。しかし、まず、ブンによるシャーの母語である中国語への切り替えに焦点を当て、分析していきたい。発話番号(49)でブンが中国語で「漂亮漂亮」と発言したのは、シャーがフライパンに割り入れた卵のことを褒めるためである。「漂亮」^{ビアオリアン}とは(見目よい)という意味である。

フォローアップインタビューにおいて、ブン^{ビアオリアン}は、台湾料理を作っている時には、シャーの母語で褒めるのが適切だと感じたという。「相手の言語」である中国語へのコードスイッチングは、そのためだったのだ。しかし、調査者が別の時に尋ねた別の中国語母語話者に聞いたところ、「漂亮(ピアオリアン)」という言葉は通常、卵の状態を褒める際には使われない。ただし、非母語話者であるブンにとって、「相手の言語」で褒め言葉を伝えることが感情をより伝えるという考えがあるため、この表現にしたものと思われる。聞き手のシャーもブンが伝えたい意図を理解している。二言語話者は、感情や発話を強調する必要がある時にコードスイッチングすることがある(高・村岡, 2009; Chew, 2021)。

会話例4.2.5では、話し手は「相手の言語」を使って相手を褒めることを意図し、「相手の言語」が共通言語よりも豊かに感情を表現すると考えている。通常、言語の切り替えで感情を表現する場合、それは話し手の感情を反映することが多いが、この会話では話し手が期待するのは聞き手の感情である。

彼らは自分の母語または共通言語で褒められた場合、どちらがより嬉しいかという調査者のイ

インタビューに対して、どの言語での褒め言葉でも嬉しいが、自分の母語であればさらに嬉しいと述べた。これは、自分が相手に教えた言葉を使用してくれたこと、または教えていない言葉でもわざわざ調べて使ってくれたことを嬉しく思っているのである。

次に、シャーがタイ語に切り替える場面を分析する。一般的には「漂^{ビエオ}亮^{リアン}」に相当するタイ語に「สวย^{スワイ}」(いい感じ・きれい)と「น่ารัก^{ナラック}」(かわいい・見目よい)があり、卵に対するものであれば、「สวย^{スワイ}」のほうが適切ではある。しかし、シャーはこの違いについて知らないため、ブンの発した「漂^{ビエオ}亮^{リアン}」を「น่ารัก^{ナラック}น่ารัก^{ナラック}」と繰り返し、(49)の形に翻訳していたのであろう。

その一方でこの「น่ารัก^{ナラック}น่ารัก^{ナラック}」は卵に対するものではなく、ブンが言った中国語の発音あるいはブン本人に対して、「かわいい」と褒める意図をもって、発話されたと解釈することも可能である。シャーによる、ここでのタイ語使用は「返礼」(4.2.4)として説明され得るし、同時に、直前のブンによる中国語使用と同様に、表現の効果を増幅させる機能も持つものとも考えられる。

4.2.6 場の性質に関する認識を共有する機能

本項で述べる機能は、「相手の言語」を用いる特定の一場面から引き出せるものではない。互恵的な「相手の言語」使用が継続的に見られる場合に、そのような互恵的かつ継続的な「相手の言語」使用がどのような機能を持つかということについて述べていきたい。その点については、次の4.2.7も同様である。

茂呂(1999)では、教師の話し始めの言い回しの変化が、子供たちに集団的な自由発話の停止を伝える手段として機能することが示されている。また、Fachriyah(2017)は教師が一般的な会話と学習関連の会話を分けるために言語を切り替える事例を報告している。さらに、Hamdan(2023)は、学習者同士の会話では、学術的な話題と一般的な話題、個人的な話題と公的な話題に応じてそれぞれの言語が使い分けられていることを指摘している。

料理場面において、参加者たちは、その場が私的な空間であると認識している。そして、互いに「相手の言語」への切り替える行為は、その空間が彼ら自身のものであるという共通認識を互いに確認する指標のようなものとして機能する。この場は彼らにとって、「相手の言語」への自然なコードスイッチングが可能である特別な場なのだ。彼らは様々な事柄について、この場の共通言語(日本語)で説明できるが、「相手の言語」でも表現が可能な場合には、それを優先して使用しているように見える。このような言語行動は、日本語クラスなどの特定の状況や、このグループに属さない他の学生が場を共有している場合とは異なる。

したがって、時間が経過するにつれ、「相手の言語」使用は、料理場面を超えて、自分はその場所を「私たちのもの」と認識しているということを象徴的に示す役割を持つことになっていく。また、これは仲間意識の形成にも影響を及ぼしており、この点については次の項で詳しく説明する。

4.2.7 仲間意識醸成の機能

前項の冒頭に記述したように、本項で述べる機能も、「相手の言語」を用いる特定の一場面から引き出せるものではない。互恵的な「相手の言語」使用の継続的な側面に焦点を当て、そのような言語行動が持つ機能と影響について掘り下げる。

「相手の言語」使用に関するデータを観察した後、調査者は参加者たちに対して「なぜ『相手の言語』を使うのか、他の人が、その人にとっては『相手の言語』である自身の母語を使うとどのような感情を抱くか」等の点について尋ねた。フォローアップインタビューからは、「相手の言語」を使用するきっかけや意図、相手が自分の言語を使用する際の感情が明らかになり、それが参加者間の関係性に与える影響についての深い洞察が得られた。

以下にインタビューの一部を示す。なお、調査者は、ブン・ナムと同じくタイ語を母語としているため、フォローアップインタビューはタイ語で実施した。チャーに対してはフォローアップインタビューは日本語で行った。

言語を教え合うことがいつ始まったのか、私も覚えていません。しかし、チャーさんとはルームメイトとして、大学でもシェアハウスでも頻繁に会っているのだから、チャーさんに、知りたいタイ語の言葉についてよく質問されています。そうするうちに、私も尋ね返すようになりました(A)。というのも、「相手の言語」に興味を持つ態度を示すことで、好印象を与えることができるからです(B)。相手に自分の言語を尋ねられることにより、私も「相手の言語」を尋ねるようになります。このようなやり取りを経て、やがてそれが習慣となりました。また、チャーさんはチャーさんの母語を一生懸命教えてくれるので、私は学んだ言葉をできるだけ使うようにしています(C)。

(拙訳) ブンへのインタビューより

私はチャーさんとルームメイトではありませんが、チャーさんはブンさんのルームメイトであり、また私たちは同じ日本語クラスです。そのため、頻繁に会い、昼食を一緒にとることもあります。言語を教え合うきっかけははっきりとは覚えていませんが、中国語を学ぶきっかけは、チャーさんがタイ語で話しかけてきた時でした(D)。チャーさんに良い印象を与えたいと思い(E)、中国語を話すようになりました。また、チャーさんがタイ語でどンドン話す様子を見て、チャーさんが努力するだけでなく、私も努力するようになりました(F)。

(拙訳) ナムへのインタビューより

わたしが思っているのはタイ人にとって、外国人が自分の言語で話しかけてもらうならうれしくなるだろうと思います。ナムさんにタイ語を聞き始めました。また、日常生活で、タイ人たちはいつも話しているときは「何が話しているのか？全然わからないなあ・・知りたい！」って思っています。もちろん、タイ人の友達が話している話の意味も知りたいです。さらに、タイ人の友達がわざわざ教えてくれたので、ちゃんと勉強して使ってみたいと思います(G)。

チャーへのインタビューより

ブンとナムは相手(チャー)がタイ語の単語を尋ねたり話したりすることに気づき、相手(チャー)が自分の言語に興味を持っていると認識する。それをコミュニケーションの重要な部分として捉え、これが「相手の言語」を学ぶきっかけとなっている(A)、(D)。彼らにとって、「相手の言語」学習は一方的な努力によってなされるものではなく、協働的な取り組みである。互い

に学んだ単語を日常の会話に徐々に取り入れ、しばしば「相手の言語」にコードスイッチングを行う。相互に「相手の言語」に関心を示すことが、良い印象をもたらすものとして受け止めている (B), (E)。そして、互いの言語を学ぶことは、言語能力の向上だけでなく、相手への関心や返礼を示す手段となっており (C), (F), (G), 強い絆や仲間意識を育てる効果があると思われる。

Fachriyah (2017) と Junaidi (2019) の研究では、コミュニケーションの過程で自分の母語を使用することは、共通言語を用いる場合と比べてより親密な雰囲気を生み出し、母語を共有する相手との結びつきや一体感の構築に寄与するとされている。

しかし、本稿で分析したデータは、異なる言語を母語とする人々によるものであり、彼らが継続的に「相手の言語」を使っている状況を考察した。この感情的な結びつきは一時的なものではなく、相手の心に響き、記憶に残り、より長期的なものであることが示唆される。このような発話行為は、前述の「場の性質に関する認識の共有」(4.2.6) と関連している。つまり、互いの言語を使うことは、集団や場所特有の共有された意識を創出し、参加者が互いに「私たちの場」または「仲間」を感じさせる重要な要因となっている。

ガンパーズ (2004) はコードスイッチングの言語使い分けについて、「We-Code」と「They-Code」という概念を提案した。二言語使用コミュニティでは、マイノリティーの言語である民族語が「We-Code」となり、公用語などマジョリティーグループの言語は「They-Code」となる。

しかし、本稿では、参加者たちは互いの言語を教え合う過程で、相手の感情を考慮しつつ「相手の言語」を使用することに積極的に努めている様子が明らかになった。この言語使用は、「場の性質に関する認識の共有」を示すだけでなく、「相手の言語」こそが「Our-Code」となる可能性をも示している。時に、彼らは自分の母語を「相手の言語」に干渉させることもあり、不自然な使用であったとしても、互いに認め合いつつ、「Our-Code」とみなす。このような言語使用は時間の経過とともに、彼らの間で連帯感や仲間意識を育てており、「相手の言語」は単なるコミュニケーション手段を超えて、時と場所、関係性を踏まえた意識的な選択を通じて、自分の準拠する集団との連帯感や仲間意識の確認手段として利用される。

3人のフォローアップインタビューから、彼らが「相手の言語」を使うことで他者と簡単に親しくなれるという感覚を持っていることが明らかになった。「相手の言語」使用は、この3人の集団内だけに留まらず、出会う別の台湾人やタイ人との会話でも使われるようになってきている。

木村 (2021) は、「相手の言語」は基本的な挨拶であっても親密な関係を築く上では重要であると述べている。同様に、本稿で「相手の言語」へのコードスイッチングは、シンプルな言葉であっても、仲間意識の醸成において中心的な役割を担い、人との繋がりを深めるための重要な手段となっていた。さらに、それは人々と容易に結びつくためのカギともなっていた。

5. 結論

以上、本稿では、交換留学生たちが料理場面での会話における「相手の言語」へのコードスイッチングの機能を分析し、7点を論じた。これらのうち、6点は先行研究と共通点を持つものの、「返礼として」の機能は、管見の限り新たに発見されたものである。最後に、これらの機能がどのように重複し、どのように異なるかを整理していきたい。

1) 「相手の言語」学習を支援する機能：先行研究によると、同じ意味の言葉を異なる言語にコードスイッチングすることが、聞き手の理解を促進し、学習効果を高めることが示されている (Fachriyah, 2017)。本稿でも、互いの言語を教え合う過程において、「相手の言語」での繰り返しやコードスイッチングを行うことが、「相手の言語」の学習を支援する一手法として活用できることがわかった。

2) 参加者への配慮の機能：先行研究 (Hamdan, 2023) と同様に、相手が確実に理解できる言語を選ぶことにより、その場に相手の存在への配慮が示されていた。

3) 娯楽としての機能：先行研究 (田崎, 2006; 藤村, 2013; Fachriyah, 2017; Chew, 2021; Hamdan, 2023) によると、笑いを誘う際に話者の母語への切り替えが一般的であることが示されている。これは、ジョークなどを理解するためには、ある程度の言語能力が必要であるという見解に基づいている。しかし、本稿では、参加者たちが「相手の言語」をできる限り積極的に用い、より精確な表現で笑いを創出していたことを取り上げている。

4) 返礼としての機能：先行研究では観察されていない新しい機能で、「相手の言語」が自身の母語を使ってくれた相手に対する返礼として用いられるていた。この場合、「相手の言語」使用が双方にとって互恵的な意味を持っていた。

5) 表現の効果を増幅させる機能：先行研究では話し手が自己の感情を強調または表現する目的でコードスイッチングを利用する例が確認された (大平, 2000; 服部, 2001; 久保田, 2004; 田崎, 2006; 高・村岡, 2009; 藤村, 2013; Chew, 2021; Hamdan, 2023)。しかし、本稿のデータでは話し手が「相手の言語」へコードスイッチングを行う意図は、話者自身の感情の増幅に焦点化されたものではなく、むしろ聞き手に生起される感情を増幅にすることを目的としていた。

6) 場の性質に関する認識を共有する機能：先行研究では、状況や場所を区別するためにコードスイッチングが用いられていることが明らかにされている (茂呂, 1999; 田崎, 2006; Fachriyah, 2017; Hamdan, 2023)。しかし、本稿では、「相手の言語」へのコードスイッチングが、単なる課題変更や状況変化ではなく、参加者間で共有される特定の集団や場の性質を暗示する手段として機能していることを示していた。

7) 仲間意識醸成の機能：先行研究では、コードスイッチングを通じて親密さを生み出し、聞き手との距離を縮めるという機能が指摘されていたが、それは一時的な関係性を築くための利用であった (高・村岡, 2009; Fachriyah, 2017; Junaidi, 2019; Chew, 2021)。しかし、本稿では、時間の経過とともに共有された空間についての認識が形成されていることが確認できた。この認識は、「相手の言語」使用を通じて生まれ、それが彼らの間での連帯感や仲間意識を育てていく重要な要素となっていた。

本稿の分析データは3人に限られた小規模なものではあるが、先行研究では見られなかった新しい機能を発見した。それは「返礼として」の機能であり、これは、図1中のAやBの言語に切り替える場合には見られない。具体的には、話し手が意図的に相手から学んだ言葉を選び、「相手の言語」へコードスイッチングすることで、互いの言葉への敬意と、相手の感情を深く考慮する姿勢が示されていた。このような、「相手の言語」へのコードスイッチングは、本稿のデータから得られた特徴的かつ顕著な機能である。

最後に、1章の最終段落に記述した交換留学生たちが「なぜ、どのような状況で、どのような

やり取りの中で「相手の言語」にコードスイッチングするのか」という問いに答えたい。本稿のデータから読み取れる限りにおいては、彼らは共有している空間内で、その場を同じように認識している人々との間で「相手の言語」にコードスイッチングを行うことが明らかになった。これはより良い関係を築くことにつながる。「相手の言語」使用は、互いに相手の心をつかみ、仲間意識を醸成する効果的な手段なのである。

多言語社会では、さまざまな言語を混在させて話すことは珍しいことではないが、本稿では、自身が初心者であったり、体系的な学習経験がない場合の「相手の言語」使用が持つ特有の機能について強調している。本稿で分析されている交換留学生たちの例は、「相手の言語」使用は、その習熟度に関わらず、潜在的に様々なコミュニケーションの可能性を持っていることを示している。

以上より、本稿で最も強調したいのは、どの言語であっても、またどのような習熟度であっても価値があるということである。マジョリティ言語でもマイノリティ言語でも、「相手の言語」を使うことで得られる効果は共通言語では得られないものがある。言語は情報伝達だけでなく、感情の共有や他者とのつながりを形成するための重要な手段でもある。「相手の言語」を使うことで、配慮や共感を示すことができる。これは相手との絆を深め、感情的な共鳴を生み出し、人間関係を築くのに効果的である。本稿の分析を通じて、単一言語の普及と使用を推奨する言語帝国主義を肯定する立場の人にも、「相手の言語」を使うことの価値と意味を伝えたい。

[参考文献]

英語文献 (アルファベット順)

- Canestrino, R., Magliocca, P. & Li, Y. (2022). The Impact of Language Diversity on Knowledge Sharing Within International University Research Teams: Evidence from TED Project. *Frontiers in Psychology*, 13. <https://www.frontiersin.org/articles/103389/fpsyg2022879154/full>. (2024年3月3日最終アクセス)
- Fachriyah, E. (2017). The Functions of Code Switching in an English Language Classroom. *Studies in English Language and Education*, 4(2), 148-156.
- Gardner Chloros, P. (2009). *Code-Switching*. Cambridge University Press.
- Hamdan, H. (2023). Functions of Student Code-Switching in a Bruneian Classroom. *Southeast Asia: A Multidisciplinary Journal*, 23(1), 55-89.
- Junaidi, A. M. (2019). The communicative function and the benefit of code switching within bilingual education program or multilingual children in learning English. *Journal Ilmiah Rinjani Universitas Gunung Rinjani*, 7(2), 59-66.

日本語文献 (アルファベット順)

- Chew, A., (2021), 「日本におけるシンガポール人留学生の多言語混用」『阪大社会言語学研究ノート』, 17: 64-87.
- 藤村香予, (2013), 「二言語話者の談話における「コードスイッチング」・「コードミキシング」の必要性—英国に住む日本人の場合—」『安田女子大学紀要』, 41: 23-32.
- ガンパーズ, J., (2004). 『認知と相互行為の社会言語学』(井上逸兵・出原健・花崎美紀・荒木瑞夫・多々良直弘, 訳): 59-99, 松柏社. (原典1982)
- 服部圭子, (2001), 「接触場面における日本語非母語話者のコードスイッチング機能を中心に」『多文化社会と留学生交流:大阪大学留学生センター研究論集』, 5: 39-58.
- 木村護郎クリストフ, (2021), 『異言語間コミュニケーションの方法—媒介言語をめぐる議論と実際』大修館書店.
- 高民定・村岡英裕, (2009), 「日本に住む中国朝鮮族の多言語使用の管理—コードスイッチングにおける留意された逸脱の分析—」『言語政策』, 5: 43-60.
- 久保田満里子, (2004), 「英語話者が日本語でコミュニケーションする際生じる問題」宮崎里司・ヘレンマリ・オット編『接触場面と日本語教

- 育—ネウストプニーのインパクト』明治書院, 185-196.
- 茂呂雄二, (1999), 『具体性のヴィゴツキー』金子書房.
- 大平未央子, (2000), 「日本語の母語話者と非母語話者のインターアクションにおける相互理解の構築—関連性理論の観点から」『日本語教育』, 105: 71-79.
- 尾辻恵美, (2021), 「メトロリンガリズムに基づいた言語教育イデオロギー—個から場所の公共性へ—」『第24回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム』, 13-29.
- 田崎敦子, (2006), 「コードスイッチング研究の概観:多言語社会のコミュニケーション分析に向けて」『言語文化と日本語教育』, 増刊特集号: 54-84.
- 田崎敦子, (2007), 「接触場面のコードスイッチングが参与者に与える影響—多言語を背景にした大学院生のグループディスカッションを対象に」『異文化コミュニケーション研究』, 19: 88-99.
- 宇佐美まゆみ, (2007), 『改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版』
<https://isplad.jp/pdf/btsj/btsj070331.pdf>.
(2024年3月3日最終アクセス)
- 吉野文・西住奏子, (2015), 「二言語併用ゼミの場面における参加者の言語使用—座談の分析に関する試論—」『国際教育』, 8: 35-50.

[注]

¹ 台湾では、一般的に台湾華語が共通言語として用いられているが、この度、データ収集において、シャーは自らの母語を中国語だと表明したため、調査者はシャーの提供した情報に基づいて記述を行った。

² 文字化の凡例は以下の通りである。本稿の文字化のルールは、原則的には、宇佐美 (2007) の『改訂版: 基本的な文字化の原則』に従った。しかし、この原則は日本語の自然な会話を定量的に分析するために開発されたものであり、本稿では定量分析を主目的としていないことと、さらには日本語、中国語、タイ語が混在する会話を扱っている点が異なる。このため、読みやすさを重視し、一部の表現を変更または簡略化した。

。	文末
？	疑問
..	ポーズまたはリズムのとぎれ (0.5 秒以下)
...	0.5秒のポーズ
{<}	重ねられた発話
{>}	重ねた方の発話
<笑い>	笑い
[↑]	上昇イントネーション
[]	文脈的情報